

ヤマトポーク調査報告

金原稔子・朝倉康夫*
(*現 家畜保健衛生所)

要約

ヤマトポークとユメサクラをとめ雄とした肉豚の発育成績、枝肉成績、肉質成績を調査し比較したところ、ユメサクラをとめ雄とした肉豚は、発育は優れているが、脂肪含量が劣る結果となった。

緒言

奈良県には、畜産ブランドとして大和肉鶏、大和牛が流通しており、さらに平成20年3月からヤマトポークの流通が始まった。ヤマトポークのとめ雄、給与飼料は認定基準に基づいて統一され、現在、5戸の県内養豚農家が出荷しており、年間3,000頭の出荷を目標としている。近年、豚肉にも“さし”や“霜降り”が求められ、ヤマトポークも美味しい脂肪を特徴に掲げており、胸最長筋内脂肪含量が4.8%あり、通常の豚肉（2%前後）に比べると高いものとなっている。しかし、と体長が短く、背脂肪が厚い傾向にあり改善の余地があった。そこで、家畜改良センターが新たに系統造成した発育と体型がよく、脂肪含量が4.5%と高いデュロック「ユメサクラ」を次世代のとめ雄候補とし、県内生産農家の協力の下、ヤマトポークとユメサクラをとめ雄とした肉豚の比較調査を行ったので報告する。

材料と方法

調査農家：県内ヤマトポーク生産農家（1戸）

調査豚

調査群：LWD（LW×ユメサクラ） 平成20年3月24日生まれ

対照群：LWD（ヤマトポーク） 平成20年3月21日生まれ

調査項目：発育成績・・・出荷日齢、出荷体重、1日平均増体重

枝肉成績・・・枝肉重量、と体長、と体幅、背脂肪厚、肉色（ポークカラースタンダード肉色用）、脂肪色（ポークカラースタンダード脂肪色用）

肉質成績・・・胸最長筋断面積（第4-5胸椎間）、胸筋肉内脂肪含量（ソックスレー抽出法）、保水力（加圧ろ紙法）、伸展率、加熱損失、食味試験

調査頭数：調査に供した頭数を表1に示した。

表1 調査頭数

	調査群		対照群	
発育・枝肉成績	去勢2	雌2	去勢5	雌1
肉質成績	去勢1	雌1	去勢2	

結果

1) 発育調査

表 2 発育成績 (符号間に有意差 : $p < 0.05$)

	調査群	対照群
出荷日齢 (日)	183.75 ± 3.50	192.00 ± 7.67
出荷体重 (kg)	121.38 ± 5.36 *	113.58 ± 1.96 *
1日平均増体重 (kg)	0.79 ± 0.04 *	0.72 ± 0.04 *

出荷体重および1日平均増体重に有意差が認められた (表 2)。

2) 枝肉調査

枝肉重量、と体幅および脂肪厚 (腰) に有意差が認められた (表 3、図 1)。

表 3 枝肉成績 (符号間に有意差 : $p < 0.05$)

	調査群	対照群
枝肉重量 (kg)	80.15 ± 4.08 *	73.17 ± 1.42 *
と体長 (cm)	97.93 ± 1.15	96.88 ± 3.18
と体幅 (cm)	35.13 ± 1.49 *	33.02 ± 0.97 *
脂肪厚 (cm) 肩	3.65 ± 0.37	3.57 ± 0.34
背	1.93 ± 0.10	2.03 ± 0.10
腰	2.73 ± 0.21 *	3.27 ± 0.33 *
肉色	4.50 ± 1.00	3.92 ± 0.80
脂肪色	2.63 ± 0.48	2.33 ± 0.52

図 1 枝肉 (上 : 対照群 下 : 調査群)



3) 肉質調査

表 4 肉質成績

	調査群	対照群
胸最長筋面積 (cm ³)	23.55	19.25
胸最長筋内脂肪含量 (%)	2.10	4.05
保水力 (%)	79.85	76.47
伸展率 (cm ² /g)	12.88	12.21
加熱損失 (%)	38.15	39.36

調査頭数が少ないため比較は難しいが、調査群で胸最長筋面積が大きく、脂肪含量は対照群の約 1/2 であった (表 4、図 2)。

図 2 胸最長筋横断面 (第 4-5 肋間)



考察

調査群は発育がよく、脂肪含量を除く肉質は対照群と大差は認められなかった。しかし、ヤマトポークの特徴としている脂肪含量が、通常の豚肉程度で、調査群と対照群を食べ比べたところ、調査群はあっさりとし、対照群は脂の風味に特徴があるといった感想が得られ、調査頭数が少ないながらも、それぞれのとめ雄の特徴があらわれた結果になったと考えられる。今回、ユメサクラをとめ雄とすることで、体型が改善され上物率が高くなることを期待したものの、重量大などが理由で、結果を得ることができなかった。しかし、他府県の報告¹⁾を参考にすると、ユメサクラをとめ雄とした場合の上物率は高く、出荷体重を調整することで改善されることが考えられる。また、ヤマトポークに比べ、枝肉処理中のドリップが目立つことや脂肪質が劣ることなどが指摘されている。脂肪含量の改善も含め、今後、飼料内容や飼育管理の向上が必要と考えられる。

参考文献

- 1) 鈴木邦夫ら 止め雄の違いによる三元交雑豚 WLD の産肉性の差 千葉畜セ研報 6 P15-19 (2006)